

「いただきます」の向こう側

隠岐の島町立西郷南中学校 三年 松林悠仁

みなさんは、毎日食べている給食について、どんなふうに感じていますか？

「おいしい」「おなかがいっぱいになる」「またこのメニューか」など、いろいろな思いがあると思います。

正直に言うと、僕も以前は、「もっと好きなメニューがあればいいのに」と、文句ばかり言っていました。でも、ある日、学校で給食室の仕事について学ぶ機会がありました。調理員さんたちは、朝早くから大きな鍋やオーブンを使って、何百人分もの料理を作ってくれていました。とても暑い中、重たい器具や材料を扱うのは、想像以上に大変そうでした。それでも、みなさんは笑顔で、ていねいに、安全に料理を作っていました。

その姿を見たとき、僕はハッとしました。「僕たちが何気なく食べている給食には、こんなにも多くの人の努力や思いやりがつまっているんだ」と、初めて気づいたのです。

給食ができるまでには、調理員さんだけでなく、本当にたくさんの方が関わっています。野菜やお米を育ててくれる農家の方、魚をとってくれる漁師さん、食材を学校まで運んでくれる配達の方。そして、毎日のメニューを考え、栄養バランスやアレルギーに気を配ってくれる栄養士さん。僕たちの健康と成長のために、こんなにも多くの人たちが関わってくれている。

それを知ったとき、今まで当たり前のように食べていた給食が、急にとてもありがたいものに思えました。それと同時に、自分が今までどれだけ無意識に食べていたのかを、深く反省しました。苦手な食べ物は残すのが当たり前。「いただきます」「ごちそうさま」の言葉も、ただ口にしていただけで、心はこもっていなかったと思います。でも、僕たちが食べる一口一口には、たくさんの方の手間と心がつまっています。だからこそ、食べ物を残さずに食べることで、感謝の気持ちを持って食べることは、とても大切なことだと思います。

世界に目を向けると、給食を食べたくても食べられない子どもたちがたくさんいます。戦争や貧困、自然災害などの影響で、安全な食事をとることができない人たちもいます。そんな中で、僕たちは、毎日あたたかくて栄養たっぷりの給食を食べることができる。それは、決して当たり前のことではありません。「食べる」ということも、すべての人に与えられるべき大切な権利のひとつです。その権利が守られていることは、誰かの思いやりや努力によって支えられているのだと、僕は給食を通して知りました。

給食は、ただおなかを満たすためのものではありません。食べ物の大切さ、人のやさしさ、感謝の心――。生きるうえで大切なことを学ぶ場でもあります。

僕はこれから、給食をもっと大切にしていきたいと思います。苦手なものも、なるべく残さず食べるよう努力します。そして、「いただきます」「ごちそうさま」の言葉に、心をこめて言える人になりたいと思います。

食べ物を大切にすることは、人を大切にすること、誰かの思いやりに気づくこと、それも人権を考える第一歩なのだと、僕は給食から教えてもらいました。